
対照的な姉妹

星流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対照的な姉妹

【Nコード】

N4562Z

【作者名】

星流

【あらすじ】

昔から、ずっと不思議だったことがある。

私達姉妹は、なぜこんなにも似ていないのだろう。

天才型でワガママ女王様の姉、咲良ウキと、努力型でこき使われる平凡な妹、美月みづきの日常。

恋愛もまったり進展します。

ワガママ女王様

小さい頃から、私は不思議にずっと思っていた。

そして、高校2年生となった今でも、その疑問は消えずに…
むしろ、理不尽な遺伝子のいたずらに腹立たしささえ感じてしまう。

「美月、私の部屋にある雑誌もってきて。」

リビングのソファで携帯をいじりながら、私に向かって命令する。
長く艶のある茶髪にゆるいパーマを本日かけてきたばかりだという
私の姉、咲良^{brk}。

「ベッドのそばのテーブルに置いてあるから、早くしてよね。」

現在、私は今日の授業の復習をしている。
リビングのテーブルで。

彼女の睫毛で覆われた大きな瞳は飾りなのか、それとも私が勉強して
いようが関係ないのか。

∴ 9割の確率で後者だろう。

まず、何様かと聞きたい。

「美月。」

少し強い口調で急かすお姉さまに、無意識にも頬が引きつる。
久しぶりに早く帰ってきた姉と2人きりでお留守番など、始めから
いい予感はしていなかった。

けど、さすがに私も我慢の限界だった。

「さつき、コーヒー淹れてあげたでしょ！その後、せっかく淹れて
あげたコーヒーが冷たくなったからって、また温めさせたのは誰よ
！」

私は椅子から立って、あくまで冷静にお姉ちゃんに聞く。

「だって、猫舌なんだから。熱いコーヒー冷ましてたら、思いのほ
か冷めちゃったんだからしょうがないじゃない。」

こちらを見向きもせず、淡々と答える姿にまたイライラが募った。

「じゃあ、携帯の充電器をもって来させたり、お姉ちゃんの洗濯物

を干したり畳んだりしたのは誰のお願い？」

家に帰ってきて、早2時間。この間、私は勉強できていないに等しい。

すべて、彼女の命令により使われた。

「私しかないじゃない。母さんは買い物に言ってるし、お父さんは今日も夜勤だし。」

そんな少し前のことも、分からなくなるくらい記憶力がないのかしら？」

…もう限界です。

鼻につくような言葉運びで、蔑まれた。

その勝ち誇った顔に欠点があれば、もう少しこの怒りは落ち着いていただろうに。

もしくは私の容姿が平凡でなければ、この敗北感は和らいだかもしれない。

力の入る拳の行き場のなさに、わざとため息をもらす。

少しだけ冷静になれた気がする。

…気のせいかもしれないけど。

そして、ある結論にたどり着いた。

自分の部屋に戻って勉強しよう。

お姉ちゃんの命令は無視。無視。何が何でも無視。

イヤホンを耳栓代わりにして、聴覚をシャットアウト。

これで、お姉ちゃんの声は聞こえない！

私は勉強道具を素早く片付けて、自分の部屋へと向かう。

つもりだったのに…。

「こんなもんしたって無駄よ。この間のテストは誰のおかげで赤点免れたのかしら？」

…いつの間にか背後に立っていたお姉ちゃんにイヤホン没収され、おまけに弱みを出された。

ええ…私の苦手科目である数学が前回のテストで90点の高得点を取れたのは、認めたくないけど、お姉ちゃんの教育のおかげ。

努力しなくちゃ覚えられない私と違って、授業さえ聞いていればテ

スト期間など必要なかった彼女の説明は、悔しいがめちゃくちゃ分
かりやすい。

「そうね、今月中ずっと私の言うとおりに動けば、来月の中間テス
トの成績が中の下から、上の中くらいにはなるかしら？」

「…雑誌をすぐに持ってきます」

私はまとめた勉強道具をテーブルにおいて、2階の彼女の部屋へと
渋々向かうことにした。

めちゃくちゃ嫌みな言い方だったが、留年したくはないから、しよ
うがない！

私は階段をのぼった。

だが、私はこの時気づいていなかった。

今日が12月1日だということを、
つまり、31日間もお姉ちゃんのがままを聞かなくてはいけない
ということ。

その事実気づいたのは、もう少し後の話で、
すぐさま激しい後悔に襲われたのは言うまでもない。

そんな私に向かつて、

「笑っちゃうくらい、単純よね。美月は。」

とムカつくくらい綺麗な微笑を浮かべて、読み終えた雑誌の片付けを私に命令した。

至福の時は放課後

幸せだあ…。

甘い香りに包まれながら、私は解放感を感じていた。

家にいるよりもゆっくりで自由な時間を過ごせるのが、学校って…
どういふことなのか聞きたい。

今日は月に2回の料理部。

本日のメニューはカップケーキである。

手軽で持ち帰りやすいため、彼氏がいる子たちの食いつきがよかった。

私はもちろん、そんな相手はいない。

だが、これでも、天才型の姉より家事能力が高い自信はある。
だてに毎日こき使われてはいない。
むしろ、それくらい誇れるものがなければ、本当に悲しくなってくる。

「よし、出来た！」

カップに生地を流し入れて、オーブンにセットする。
あとは15分待つだけだ。

「さすが、美月、手際がいい。」
「しっかり者で、この部活の部長の清香きよかに誉められると、純粹に嬉しい。」

「本当。毎日、朝ご飯とお弁当作ってるだけあるよねっ!!！」

明るい性格で、屈託のない笑みが可愛らしい彩ちゃんあや。
ほわほわした彩ちゃんあやは私の癒やしだ。

「お母さんは朝早いからね。お姉ちゃんあねは朝起きれないから、消去法で私しか作る人いないだけだよ。」

まあ、お姉ちゃんあねは起きたとしても作る気ないんだらうけど。
正直、姉の料理姿は絵にはなりそうだが、まったく想像できない。

「美月のお姉さん、一回見たことがあるけど、めっちゃくちや美人だよね。」

「えっ!?!清香ちゃんきよか見たことあるの?」

「偶然ね。お姉さんと美月が一緒にいたときに会ったの。優しそう

なお姉さんだったよ。」

ああ、あの日は上機嫌だったからね…。

面倒くさがりではあるが、社交的なお姉ちゃんを悪く言う人は…私を含めごくわずかだ。

私自身、お姉ちゃんの本性を言わないからね。

後が怖いし、言いなりになってるなんて恥ずかしいし。

「美人なお姉さんとお買い物？」

「確か、ケーキ食べに行くって言ってたよね。」

そう、あの日は衝撃的だった。

私がお姉ちゃんの命令で作ったガトーショコラ。

それをバレンタインに、本命に渡したらしい。

そして、後日、なぜかケーキを奢ってくれた。

渡した人とどうなったのかは、まったく興味なくて聞いてないけど…
…食べに行ったケーキはおいしかった。

「お姉さんがいるっていいな。彩は弟しか、いないもん。」

「あのね、お姉ちゃんがいたって、毎回奢ってくれるわけじゃない

よ？彩ちゃん。」

あの日がお姉ちゃんが私に何かを奢ってくれた最初で最後の日となるかもしれない。

この先の未来に、そんな幻のような夢を期待するだけ無駄なのだ。せいぜい、一緒に買い物に行っても、荷物持ちにされるのがオチだ。

その光景が簡単に思い浮かぶから、恐ろしい。

「いいなあ。うちの兄貴なんて、自分だけ遊んでばかりだよ。」

「悠希さん？」

清香のお兄さん、悠希さんは私達の2つ上で、今は大学生。

去年、同じ委員会でお世話になったが、誰にでも優しく、ノリのいい彼は、年齢関係なく友人が多かった。

1回、可愛い女性と歩いているところを見たことがある。

清香には秘密にしておきたいのか、私と目があつたとき、とても慌てていたなあ。

「美月、うちの兄貴と美月のお姉さんと交換しない？」

悠希さんとうちのワガママ女王様のお姉ちゃんじゃ、明らかに割に合わない。

「遠慮しとく。」

清香が損するから、と続けようとしたところで、オーブンが鳴った。

私はカップケーキにきちんと火が通っているか確かめるため、竹串を取りに行った。

「悠希先輩、美月ちゃんの眼中にも入ってないよね。」

「なんか、可哀想だから、美月のカップケーキを兄貴のお土産に持って帰ってあげよ…。」

「美月ちゃんも鈍いっていうか、なんていうかね。」

美味しくできた持ち帰り用の3つのカップケーキは、清香に1つ（どうしても食べたいらしく）あげた。

あとの2つは、お姉ちゃんとお母さんが食べた。

「まあまあね。」

次にカップケーキ作るときは、ココア風味にしてよね。」

いちいちムカつく感想は余計だったけど。

週末の帰り道

キンコンカンコーン

今日の授業の終了を告げるチャイムが校舎に鳴り響いた。

私の周りの人達は、早々と机の上を片付けて、いそいそと教室を出て行く。

本日、週末。

金曜日の授業は、厳しい時間割でも、明日が休みだと思つと多少の我慢も出来るものだ。

だが、現在の私の心境は正反対だ。

可能ならば、土日も授業を入れて欲しい。

休日は家にいる分、お姉ちゃんからの命令の数がハンパないのだ。

私は先週の土日を思い出し、更に学校に止まりたくなつた。

だが、今日はそういう訳には行かないのだ。

「美月〜！これから、美味しい物でも食べに行かない？」

節約家な清香が珍しく、私を誘ってくる。

私は授業中にしかかけない、黒いフレームのメガネをしまいながら、美味しい物という誘惑を振り払って断った。

「ごめん！今日、用事があるんだあ…。」

これから、私はお姉ちゃんを作る年賀状の手伝いをする事になっていた。

お姉ちゃんが大学から帰ってくるまでに、

送る人の住所をパソコンに打ち込まないと私の休日はなくなってしまう。

また、どこでこんなに知り合ってくるのかというほど、彼女の送る相手は多い。

よく言えば社交的、悪く言えば外面そとづらがいい彼女は、面倒くさがりな癖くせにこつこついうことは忘れないのだ。

それに加え、私も年賀状を作らないとヤバイ。

中学の時の仲がよかった友達に送るだけだが、姉のものにうわのせ上乘すれば、また結構な数になる。

機械に弱い私にとって、気が遠くなる大変な作業だ。

「あら、残念。せっかく臨時収入入ったのにな。じゃあ、また今度、誘うね!」

「うん。ごめんね。じゃあね!」

清香に手を振って、教室を後にした。

はあ…年賀状頑張って作らないと。

帰り道、私は考え事をしながら歩いて帰ることが多い。

家までの寒い帰路も、考え事をしていれば、意外と早く着くものだ。

それにしても、本当にお姉ちゃんの命令に振り回されているなあ。
私。

もちろん不本意だけど…住所さえ入力すれば、私の年賀状もコピー
してくれるって言ってたし。

…ええ、それに釣られて今回の命令を遂行することになりましたと
も。

だって、機械は本当にチンプンカンプンなんだもん。

文字入力くらいなんとか出来ても、コピーとか印刷とかはお手上げ
状態だ。

っていうか、今月は基本的にお姉ちゃんの命令聞かないといけない
からね。

成績アップのために耐える気でいたが、
今月は…まだまだ半分以上ある。

私は無意識に大きなため息をついて、とぼとぼ歩いて帰った。

予定は狂うモノ

…やっと年賀状、出せたあゝ。

私は解放感を感じ、ポストの前で一息ついた。

只今、土曜日の昼時だ。

私の当初の予定では、今頃は家で課題をやっているはずなのだ。

が、予定は昨日の夜にすべて狂った。

帰ってからすぐに取りかかった、住所の入力。

私は挫折しそうになりながらも根気よく続け、最終的に3時間費やし入力を完了した。

あくまで、私はお姉ちゃんが帰ってくるまでに終わらせたのだ。

だが、お姉ちゃんが帰ってきて、入力が終わったのを報告していたとき、

「美月ちゃん、お父さんと私の年賀状も作ってくれない？」

私よりも機械オンチなお母さんが、まさかのお願いをしてきた。

お母さんがパソコンを使うのは、お姉ちゃんからしたら勘弁してほしいだろう。

パソコンの持ち主はお姉ちゃんだからだ。

お母さんに使わせたら、データが吹っ飛ぶだけじゃなく、最悪、再起不能になるかもしれない。

そして、すぐにお父さんやお母さんの年賀状も作るようにと、ノルマが追加されたのだ。

親戚や友人、知人にとお姉ちゃん以上に年賀状を書く2人の年賀状の追加は…正直いじめだ。

最終的に文字入力の日付を越えるまでかかった。

「本当に機械に弱いわよね。私だったら、美月の半分はかからないのよ。」

朝、お姉ちゃんに皮肉を言われた。

ならば、自分でやれ、と心の底から叫びたくなっただが、理性を総動員させて我慢した。

成長したな…。私。

今、家に帰ってもお姉ちゃんはいない。

大学に用事があるらしく、夜まで帰ってこない。

これから、どうしようか。

そういえば、シャー芯がもう少しでなくなっちゃうんだよね。

近くの書店によって行こう。

止まっていた足を動かし、私は書店へと向かった。

家から歩いて20分で行けるこの書店は、品揃えがいい。

文房具と本を眺めているだけで、1時間は余裕に潰せる。

まだお昼ご飯を食べていないが、軽食を販売しているスペースもあり、不自由はない。

買い物は帰る間際にするのが、荷物が邪魔にならなくていい。

まず、話題の新刊コーナーを見に行こうと、歩き始めたとき、

「美月ちゃん？」

後ろから男の人の呼ぶ声がしたので、振り返った。

私より頭1個分高い身長。

清香と似ている中性的な顔立ち。

髪の毛は黒から濃いめの茶色に変わったが、優しい雰囲気は変わらない。

「悠希さん。」

清香の兄である彼はにっこりと笑い、久しぶり、と返した。

和やかなひととき

まさか、この前の話に出てきた彼に会うとは…偶然とは時に奇妙なものだ。

悠希さんは、今日は彼女さんと一緒ではないらしい。

そうでなかったら、私は彼に誘われていないし、向かい合ってカフェコーナーに座ってもいない。

ここに来るのが始めてだという彼は、とりあえず、私と同じカプチーノをオーダーした。

温かくておいしいカプチーノを飲みながら、私達は他愛もない話をしていた。

話し上手な彼の話は、いつもおもしろい。

去年、委員会で会ったときには、必ず話しかけてくれた。

ふと、そのときのことを思い出して、こんな時間が懐かしいと思えた。

だが、同時に雰囲気やちょっとした仕草に変わったなあと感じるところもある。

もちろん悪い意味ではなく、ただ、大人に近づいているんだなあと思っただ。

考えてみれば、悠希さんに会うのは久しぶりだ。

6月に清香の家に泊まりに行ったとき以来だろうか。

半年くらい会っていないだけで、こんなにも大人っぽく、頼もしく思えるものなのだろうか。

男の人の変化は侮れない。

それがちょっとだけ羨ましく思える。

私ももう少し身長と胸が成長して欲しかった。

スタイルのいいお姉ちゃんと並ぶと、悲しくなるのだ。

「そつだ。美月、この前のカップケーキ美味しかったよ。」

悠希さんは思い出したように、微笑みながら言った。

…カップケーキ？

私は話が分からず、少し考えを巡らせた。

ああ、もしかして、部活で作って清香にあげたあれのことかな。

「ありがとうございます。」

悠希さんはカプチーノをぐくりと一口飲んで、少し冗談っぽく愚痴を言いはじめた。

「また美月の作ったお菓子が食べたいな。」

去年はもらい放題だったのに、今年はまだカップケーキだけしか食

べてないよ。」

そりゃあ、今年から大学生になったのだから、わざわざ渡しには行けない。

そもそも、去年だって悠希さんにあげようと思っていたわけでない。何人かの女子から貰ったにも関わらず、悠希さんは委員会や帰り道でしつこく催促するのだ。

よほど、甘い物が好きなのだろう。

ならば…と思い、悠希さんに一つの提案を試してみた。

「じゃあ、明日、お家にお邪魔してもいいですか？ババロアを作って持っていきます。」

実は、明日のおやつにババロアを作るようにお姉ちゃんから命じられていた。

お菓子づくりは趣味の領域なので、命令されなくても作ることだつてある。

大抵はお姉ちゃんのリクエストで、作るお菓子が決まるのだ。

清香が確かババロア好きだったし、兄妹で食べれるなら、ちょうどいい。

だが、彼は少し目を見開いたまま固まっている。

応答がない。

悠希さん、ババロアは苦手なのだろうか。

「悠希さんが嫌なら別に……。」

清香の分だけ持って行きます、と続けようとしたところで、遮られた。

「ごめんごめん。嫌じゃないよ。ちょっとびっくりしただけで。」

少し顔を赤らめて、彼は弁解した。

私は安心して、笑った。

「そうですね。じゃあ、少し多めに作るので、清香と一緒に食べてくださいね。」

清香にも後でメールで伝えておかないとね。

「…そういうことか。あ、うん。頑張つて死守するよ。」

悠希さんは何故か苦笑気味に頷いて、溜め息を小さくもらした。

独り占めにしたいほど、悠希さんもババロア好きなのだろうか。

似たもの兄妹だなあ、と私はカプチーノを飲みながらこっそり笑った。

聖夜の予定

初雪が降った寒い道を新鮮に感じる。

家からゆっくり歩いて20分、私は清香の家についた。

右手には、今朝作ったババロアの入ったボックスを持っている。

味にうるさいお姉ちゃんから、おいしいと、嫌みなしの賞賛をもらったので、きつと2人も喜んでくれると思う。

チャイムを鳴らすと、清香と悠希さんがいっしょに出迎えてくれた。

いくらそっくりな2人でも、こうやって並んで見るとやっぱり違うところもあるものだ。

特に今は、それがはっきりと分かる。

「いらっしやい。美月、わざわざありがとね！」

清香の目がめちゃくちゃ輝いている。

待ってましたという表情だ。

いつもはお姉さんの存在な清香も、女子高生らしく甘い物には目がないのだ。

下手すれば妹のようだと、私は小さく笑った。

「ううん。これ、お待ちかねのババロアね。」

「やった！早速、切り分けてこよつと。あ、美月あがってね。」

一気にテンションが上がった清香はすぐに食べるらしく、キッチンに消えていった。

あの勢いなら、一気に全部食べてしまつかもしれない。

すらっとした長身とスマートな外見に惑わされがちだが、清香は大食いなのだ。

しかも、食べても太らない、ニキビもできないという、女子なら誰もが憧れる理想的な体質の持ち主だ。

私が作ったワンホールのババロアなんか、余裕で食べれるのだろう。

やれやれという顔している悠希さんと目が合い、お互いに吹き出した。

互いに思っていたことは同じだったようだ。

「寒かっただろ？上がって暖まってよ。」

「はい。お邪魔します。」

広々としたリビングは暖房がついていて、冷えた身体が喜ぶ。

私はふかふかのソファに座って、悠希さんが淹れてくれたカフェオレを飲んだ。

「ふう〜おいしい。」

私はため息をつくように零すと、悠希さんは小さく何かを呟いた。

小さすぎて聞こえなかったが、私は特に気にせず、悠希さんにカフェオレのお礼を言った。

「苦くないか？ミルクが足りなかったら、言ってな。」

私は苦いコーヒーが飲めないので、いつもミルクと砂糖を自分で入

れるのだ。

去年に何回かお邪魔に来たから、私の好みを覚えていてくれるのか、甘さはちょうどいい。

「大丈夫です。」

「そっか。」

彼はコーヒーを一口だけ口に含んで、少し考えたように言った。

「…あのさ、美月はクリスマス空いてる？」

クリスマス…。

イブの昼は清香と彩ちゃんと遊びに行く予定だ。

ケーキバイキングの招待券を3枚ゲットしたとのことで、彩ちゃんに誘われたのだ。

そして、夜は家族でご馳走を食べたりすることになっている。

けど、次の日、クリスマスの予定はから空きだ。

お姉ちゃんは1日遊びに行くらしいから、家で特にやることもないだろう。

「空いていますよ。」

私がそう言うと、彼の表情が一際明るいものになった。

クリスマスに何かあるのだろうか。

私が疑問に思っていると、悠希さんにはにっこりと笑って言った。

「じゃあ、今日のババロアのお礼をしたいから、1日あけておいてね。」

「お礼なんて…。」

ただの趣味で、しかも姉の命令ついでに作ったのに、お礼なんて申し訳ない。

私はすぐに遠慮した。

「友達がバンドやっていて、クリスマスライブやるらしいんだけど、1人で見に行くのは淋しいんだよ。大したお礼じゃないけど、美味しいもの奢るしさ。」

彼は少し焦ったように言ってきた。

そういう風に言われると、断れないなあ。

…決して、美味しいものに釣られたわけではない。

私は彼の誘いを受けることにした。

「分かりました。よろしくお願いします。」

彼の優しさに私は自然と頬が緩んだ。

ふと、悠希さんの彼女さんにちょっと悪いなと思った。

きっと、クリスマスは都合が悪くて一緒に行けないのだろう。

「けど、悠希さん。彼女さんがいるんですし、無闇に他の人を誘っちゃダメですよ。」

私はこちらから半分、忠告半分で、彼に言った。

勘違いⅡ誤解

瞬間、コーヒーを飲んでいた彼は突然激しく咳こんだ。

その普通じゃないむせように、私は驚き、

「だ、大丈夫ですか？」

と、恐る恐る声をかけた。

彼はめちやくちや苦しそうにして、何かを訴えるように私を見た。

な、何かまずいことを言ってしまったのだろうか。

私は少し焦って、彼に聞いてみようとした。

が、

「はあ！？兄貴、彼女いるのっ!？」

リビングのドアを勢いよくあけた清香の声にびっくりして、私も悠希さんも言葉を失った。

切り分けてきたババロアをテーブルに置いて、清香は彼に少しつり上がった目をむける。

盗み聞きしていたのか、聞こえたのか、清香は悠希さんに疑問を投げかけた。

「ちょっと、どういふこと!？」

清香はなぜか怒ったように、悠希さんへ疑問を投げかける。

だが、なぜそこまで清香が怒りをあらわにしているのか分からない。

私もお姉ちゃんに彼氏がいたと知ったら、驚きはするだろう。

けれど、怒ったりとかはしない。

むしろ、相手の男性を崇拜したい気持ちで満たされること間違いない。

私はこの事態がよく分からず、交互に2人を見た。

。「清香、ちょっと落ち着いてくれって。」

やっと普通に呼吸ができるようになったらしい、悠希さんが清香をソファーに座るように促した。

清香はつり上がった目をそのままにして、しぶしぶ私の隣に座った。

彼は少し困った顔で、私に聞いた。

「えっと…美月、どこから俺に彼女がいるって話を聞いたの？」

「聞いたも何も…6月に悠希さんと映画館で会ったとき、一緒にいたじゃないですか。」

あれは…私が中学時代の友達と映画を見に行った時だった。

映画を見終わって、帰ろうとしたときに悠希さんを見つけて、私が声をかけた。

そのとき、彼の隣に清楚で可愛らしい女の人がいたのだ。

私はデートなのだろうと思って、挨拶だけして帰ったのだが、彼は覚えていなかったのだろうか。

私は悠希さんをちらっと見た。

少しの間、記憶をたどった彼は、思い出したようで、あれか、と咳いた。

私が小さく頷くと、悠希さんはちょっとだけため息をついて、苦笑を浮かべた。

「兄貴、思い当たるふしでも、あるわけ？」

しばらく黙っていた清香がしびれを切らしたようで、悠希さんに聞いた。

「あの日、一緒にいた人は友達の彼女だよ。」

「友達の彼女？」

清香が意味が分からないという風に聞き返す。

私もイマイチよく分からない。

「美月はちょうどタイミング悪くて会わなかったみたいけど、本当は俺の友達と3人で見に行ったんだよ。」

…清香、あいつのことだよ。晶あきの彼女、知ってるだろ？」

清香はそれを聞いて、納得したような顔をした。

きつと、清香はその悠希さんの友人を知っていたんだろう。

テーブルの上のババロアに手をのびしながら、

「なあ〜んだ。慌てて、損しちゃった。」

と、清香がいつもの調子で言った。

「俺は今、付き合ってる人はいないよ。清香、当たり前だろうが。」

悠希さんは少し呆れたように、清香に言った。

なんだか…私だけ会話についていけない。

今までの話をまとめると、
映画館には友達、友達の彼女、悠希さんの3人で行っていた。
そして、悠希さんには現在彼女がいらないらしい。

それは、つまり…

「私の勘違い？」

「まあ、簡単にまとめるとそういうことよね。」

清香はそう言って、ババロアを口に入れた。

私は少し恥ずかしくなりながら、悠希さんの方を見た。

「ということだから、安心して、クリスマスは誘われちゃってよ。」

悠希さんは笑いながら、私に言った。

勘違いで、2人を振り回してしまった私は素直にはい、と返事をするしかなかった。

鋭い姉と鈍い妹

天気が荒れてきた。

水つばい雪がぴちゃびちゃと降っている車窓の外を見て、私は悠希さんに車で送ってもらってよかったと思った。

雲行きが怪しいから、と車を出してくれた彼の優しさに私は心から感謝した。

「今日はありがとう。ババロア、本当においしかったよ。」

私の家について、彼は言った。

清香と悠希さんは実に味わって食べてくれて、作ってきてよかったなと思った。

特に清香の食べっぷりは、ひと切れ食べた私が見ているだけでお腹いっぱいになるほど、素晴らしかった。

「喜んでもらってよかったです。」

お姉ちゃんのために作ることが多いお菓子だが、

彼女は基本的に文句、しかも、「砂糖が多いわよ。私を太らせる気？」と、自分中心的なことしか言わない。

だから、2人のような反応は本当に嬉しかった。

「送ってくれてありがとうございました。」

「どういたしまして。」

悠希さんは爽やかに笑う。

助手席に座っていた私は、今更彼との距離が近いんだということに気づいた。

意識した途端、私は何故か彼を直視出来なくなった。

勝手に気まずさを感じた私は、急いで車から出ようとしたが、悠希さんに引き止められた。

「ごめん。帰る前にメアド教えてくれないかな？
クリスマスのこと、後で詳しく連絡したいからさ。」

ああ、と思い、私は携帯をポケットから取り出す。

音楽を聴くことが好きな私だが、バンドの演奏を生で聴いたことは
1回もない。

気に入ったバンドのCDを買って聴いたりするだけだったので、実
は誘われて嬉しかった。

プラス、美味しいものを奢ってもらえるなんて…私の方が得しすぎ
だ。

悠希さんに悪いから…また今度、お菓子を作って、持って行くことか
な。

私達はお互いのメアドを交換し終わって、携帯をしまった。

「クリスマス、楽しみにしてますね。じゃあ、また今度。」

私は車から降りて、急いで雨が当たらないところへ走った。

車の中にいた彼はしばらく目を見開いていたが、すぐに嬉しそうに笑った。

私は手を振って、彼と別れた。

「ただいまー！」

私はリビングのドアを開けてから、言った。

お母さんはキッチンで夕食を作っているらしく、リビングにはお姉ちゃんしかいない。

私はクリスマスのことを、一応お姉ちゃんに言っておかないとだなと思って、声をかけた。

「お姉ちゃん、私もクリスマスは予定入ったから、その日は何も頼まないでね。」

ソファーにもたれかかりながら雑誌を眺めている彼女は、チラッと私の方を見た。

「誰かと出かけて来るの？」

「うん。清香のお兄さんとバンドの演奏を聴きに行くの。」

私は楽しみだなあという思いから、ついテンション高く答えてしまった。

「へえ〜。」

お姉ちゃんは少しニヤリとして、言った。

なんだなんだ。

その面白いものを見つけた子供ような笑みは。

嫌な予感しかしないのは、私の気のせいではないと思う。

「美月はその人のことをどう思ってるわけ？」

はい…？

投げかけられた言葉の意味が瞬時に理解できなくて、私は固まった。

私がすぐに答えられず、黙っていると、

「あんたって…本当に鈍いわよね。」

つまらないわ…と呟いて、お姉ちゃんは視線を雑誌に戻した。

小馬鹿にしたような態度のお姉ちゃんに、いつもならムカつくはずだが、今はそんな気持ちにはならなかった。

ただ、考えた。

『悠希さんをどう思ってるか。』

なんで、そんなこと聞いたんだろっ…？

どついつ意味を含んでお姉ちゃんは聞いたんだろっ？

私はモヤモヤした気持ちのまま、携帯に登録されたばかりの悠希さんのアドレスを眺めていた。

懐かしいあの時

おいしい〜。

私は大好きな苺のショートケーキを口にいれて、うっとりとした。

本日、クリスマスイブ。

私達3人はケーキバイキングに来ている。

周りには、私達のように友達だけで楽しんでいる人もいるため、居心地がいい。

美味しいケーキを食べて、仲良しの友達と過ごすイブだって、ステキなものだ。

「そういえば、美月ちゃん、悠希先輩とバンド見に行くんだって？」

ふと思い出したような口ぶりで、彩ちゃんがケーキを食べながら、私に聞いた。

突然彼の話をされて、動揺した私は、食べていたケーキを落とすうになっってしまった。

…あぶないあぶない。

「うん。明日ね。」

私は落ち着こうと、紅茶を一口飲んだ。

お姉ちゃんに、悠希さんをどう思っているのか、と聞かれてから、彼のことを考えることが多くなった。

けど、今だにその質問の意図と、答えがよく分からない。

はあ…。

お姉ちゃんは何が言いたかったんだろう。

「じゃあ、デートかあ！いいなあ。」

「…デート？」

誰と誰の話をしているのだろう。

悠希さんのことで頭がいっぱいで、彩ちゃんと清香の話を無意識に聞き逃してしまったのかもしれない。

「デートでしょ！悠希先輩はそう思ってると思っけ？」

「…はい？」

…この話の流れは、もしかしなくても、明日私と悠希さんが一緒にバンド見に行くことをデートと言っているのだろうか。

って、デート!?

私は目を見開いて、一瞬固まった。

そんなこと考えてもいなかった。

デートって…そっか。

男の人と2人で出かけるんだから、そう思われてもおかしくないのかもしれない。

でも、それって…付き合ってるみたいじゃない?

「もしかして、美月はそういつつもりじゃなかったの?」

清香がため息をつきそうな顔で私を見た。

その横で彩ちゃんは苦笑している。

「悠希さんの友達がバンドやるから、見に行くだけだし、デートなんて…。」

「ああ、悠希先輩と美月ちゃん、音楽の趣味が合うもんね。」

彩ちゃんが納得しながら、明るく笑った。

そう。悠希さんとは音楽の好みが一致して、よく話をした。

委員会のときに、悠希さんとおあるバンドの話で盛り上がったことが始まりだった。

そのバンドは、当時私が心密かにハマっていたロックバンドだ。

けれど、あまり有名なバンドじゃなかったため、私の周りに知っている人はいなかった。

だが、偶然、悠希さんがそのバンドのファンで、CDを持っていた

のだ。

私達はそれがきっかけで意気投合した。

いろんな方面から語り合った。
作詞や作曲の魅力はもちろん、演奏のクオリティや細々とした演出
についてと、ネタは尽きなかった。

懐かしいな、と思う。

…彼と話した委員会の時間はとても有意義だった。

この間、書店で会ったときは音楽についての話題は出なかった。

だから、明日は思いっきり語り合えるのだと思う。

彼が誘ってくれたことに他意はないのだ。

ただ、同じ趣味の私を親切心で誘ってくれただけ。

私は生演奏を聴きに行ったことがないと話したことがあるから、誘ってくれただけで。

それ以外の理由など、ないだろう。

私はお皿の上のケーキをすべて食べ終え、フォークを置いた。

「ねえ。」

清香に声をかけられて、視線をむけると真剣な顔をして私を見ていた。

清香の凜とした声が響く。

「美月は兄貴のことをどう思ってるの？」

私は驚いて、すぐに言葉が出なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4562z/>

対照的な姉妹

2011年12月24日11時51分発行